

働く女性のコモンセンス—— 豊かさもキャリアも、 自分自身でつかみ取るもの

産・官・学連携の国家研究プロジェクトのグループリーダーを務め、2003年に世界で初めて実用的な遺伝子解析用DNAコンピュータを開発した女性研究者として、その功績が知られる唐木幸子さん。一児の母でありながら、最先端の研究に従事する彼女に、これまでのキャリアについて伺った。

オリンパス株式会社
研究開発センター 医療技術開発本部
診断技術開発部 部長
唐木 幸子 さん



——大学では薬学部で細胞生物学を専攻されていたようですが、オリンパスに入社した経緯を教えてください。

私がオリンパスに入社した昭和53年ごろは、オイルショックで今よりもさらに就職難の時代でした。薬学部を出ても製薬企業の求人はいくつか、大学に求人がある薬剤室に勤める以外、ほとんど選択肢はありませんでした。その中で唯一、研究職として採用してくれたのがオリンパスだったんです。

オリンパスというと、カメラや内視鏡といった光学機器メーカーのイメージをお持ちの方が多いと思います。バイオロジーの分野で研究職として入社したのは私が初めてで、今から30年前のことです。これからはパスもかなり先を見ていたでしょうね。これからは医療・ライフサイエンス分野において、ハード面だけではなく、自分たちの手で細胞を扱えるようにならないといけないと考えていた。そこで細胞を扱える研究者を採用しようと、教授経由で就職活動をしていた私に声が掛かったわけです。

私が所属していた研究室は、当時は日本に数カ所しかなかった「組織培養」を行っている研究室の一つでした。今では誰もが実験研究で使うけど、当時ではまだ珍しく、無菌状態で培養した細胞を生きたまま見る事ができるのすごく感動した記憶があります。その研究室を希望した学生はとて多くて、最終的にはジャンケンで研究室を決めましたから、もしかしたら私とオリンパスの縁はあの時のジャンケンだったのかもしれない（笑）。

——入社されてから、どのようなお仕事やプロジェクトを担当されましたか。

現在は、研究開発センターの医療技術開発本部で主に基盤技術開発のマネジメントに携わっていますが、入社してからは医学やバイオロジーの最先端の領域で研究開発を行ってまいりました。直接的に顕微鏡や内視鏡といった製品を設計するわけではありませんが、エンジニアとひざを付き合わせて、「どういった新規技術が役立つか」を研究者の視点で提案したりしています。

研究者としての役割をあらためて認識する上でも印象に残っているのが、ゲノム医療事業推進プロジェクトで、世界初の遺伝子解析用DNAコンピュータを発表した時のことですね。急ぎよ要請を受けて経団連で発表することになったのですが、通常は経団連での発表というところ、カメラなどの製品レベルのものがほとんど。DNAコンピュータといっても概念的で、デスクトップで計算するような一般的な形ではなかった。最初は「こんな基礎研究段階のものを本当に発表していいの？」と戸惑いました。

結果的には、オリンパスがゲノム医療に取り組みということで、メディアにはとても前向きで好意的な評価をいただきました。光学・機械・電気・ソフトウェアなど、さまざまな分野の人間が活躍する中で、確かに私たちの分野は即座に事業に直結するものではありません。でも、バイオロジーの研究を通じて、将来に向けたオリンパスの心意気や新しい技術の貢献の姿を描くことができる。それが研究者としての大きな役割の一つだと思っようになりましたね。

——これまで仕事をすることで、特に大変だったことを教えてください。

仕事の面でいうと、基礎研究は出口を設定しても成果が見え辛いことや、マネージャーとして研究者が能力を発揮しやすいように業務配分を最適化することなど、日々課題はたくさんあります。

個人的な面で特に大変だったのは、出産後に職場を離れることになった時です。妊娠8カ月の時に妊娠中毒症を起こして早産してしまい、生まれた子供は体重わずか687グラムの超未熟児。五つ子より小さな赤ちゃんで、生まれてすぐにNICU（新生児の集中治療室）に入れられ、助かるかどうか予断を許さない状況で精神的にも不安定な日が続きました。

当初は出産後すぐに復帰予定でしたが、そんな状態の子供を置いて仕事に出ることはできないので、1年間育児休暇をとることに。職場を離れるのも不安でしたし、子供の成長具合によっては仕事に戻れるかも分からなかったのも、ほかに選択肢がないとはいえ、私にとっては苦渋の決断でした。

さらに大変だったのが、仕事に復帰する時。子供の主治医の先生にも後押しをしてもらい、自分でも色々調べて、保育園やファミリーサポートセンター、地方自治体の制度など、あらゆる社会的な支援制度を活用して復帰の準備を整えました。私は仕事が大好きで風邪を引いても休まない人間なのですが、それでも子供の体調が優れなくて、有休を年間15日も使ってしまったときは、少し落ち込んだりもしましたね（笑）。

——研究職は忙しいイメージがありますが、仕事と子育てを両立させるためには？

最近では「ワークライフバランス」なんて言葉もありますが、会社の制度や周りの人に期待をし過ぎてはい

けないと思います。支援制度が整っているに越したことはないけど、今無いものに期待しても仕方がないですから。仕事を長く続けていきたいのであれば、結婚するにしても、出産するにしても、まずは当事者である自分があらゆる知恵を絞ること。誰かに何かしてもらおうと考えるのは大間違いで、自分にすべての期待を向けるべきです。自分で全部何とかしようと思っていた方が、周囲に支援してもらったときに感謝もできますしね。オリンパスの女性研究員は出産しても辞める人が少ないのですが、それは会社の制度のおかげというよりは、個々人の労働に対する姿勢や考え方によるところが大きいのではないのでしょうか。

育児休暇中、今でもショックで覚えているのが、子供を抱いて本屋さんに出かけて、大好きな作家の新刊を見つけた時に、思わず値段をチェックしてしまったことです。買う前に値段を確認することは普通かもしれませんが、自分が勤務している時は、好きな作家の本の値段なんて全然気にしませんでしたから。夫は「食わしてやってる」なんて言う人ではないのに、経済的に自立している自信がないとこんなに卑屈になるんだ、と痛感しました。私が私らしく豊かに生きるために、「絶対仕事に戻ろう」と強く決意した瞬間でした。仕事を長く続けている人は、同じような共通するセンスを持っていることが多いです。自己実現だと肩肘張って意気込むより、何が何でも働くという意欲があれば、仕事も子育ても何とかなるものだと思います。

——最後に、これから就職活動をする理系学生にメッセージをお願いします。

今の学生さんはキャリアアプランだのスキルアップだ

の、そういったものを少し意識し過ぎかなと感じています。最初は、最近では選択肢が多くていいなと思いましたが、今やなくなっていい目標設定まで迫られて、かえって迷いが生じているような気がしてなりません。もちろん将来を考えることは重要ですが、実際には目の前のことができていない人が多い。理系の学生であれば、目の前の研究や実験がまず先決。キャリアアアップといっても種がなければ育たないので、自分のやるべきことをおろそかにしていないか、今一度考えてもらいたいですね。

採用面接などで、会社の教育制度や福利厚生とか、会社の付帯的な事項を質問されることもあります。個人的には制度で人は育たないと思っています。大切なのはやはり本人に基本的な労働意欲があるかどうか。今やっていることにしつかり視点を向けて着実に歩みを進めている人にこそ、価値のあるキャリアは開けていくと思います。



唐木 幸子（からき・さちこ）

オリンパス株式会社
1978年に金沢大学薬学部を卒業後、オリンパス光学工業株式会社（現：オリンパス株式会社）に入社。1994年、医学博士号取得（東京大学大学院医学系研究科）。世界初遺伝子解析用DNAコンピュータ開発の功績により、2004年にウーマン・オブ・ザ・イヤーを受賞した。著書に『小さな小さなあなたを産んで』がある。